



Title	談話の先頭位置に生じる前位分詞構文について
Author(s)	甲斐, 雅之
Citation	Osaka Literary Review. 2001, 40, p. 115-126
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25203">https://doi.org/10.18910/25203</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 談話の先頭位置に生じる前位分詞構文について\*

甲斐 雅之

1.

分詞構文は意味上の主語を主節に依存するため、分詞節が前置されると意味上の主語の特定が後続する主節主語まで待たねばならない。分詞が前置された前位分詞構文は、前置された副詞節の主語代名詞が主節の名詞句を承ける逆行照応とちょうど同じ状況になる（甲斐（2000:101））。大江（1983:227-8）によると、分詞節が前置され、意味上の主語が先行文脈から明瞭な場合であるという趣旨のことが述べられている。これは、Kuno（1975:280）の言う予測可能性と軌を一にするものである。このことは、前位分詞構文の多くが談話の中位に生じており、また、主節主語が代名詞であることが多いという指摘（小谷（1993:232））からも裏付けられる。例えば、前位分詞構文が生じる典型的な文脈は次のようなものである。

(1) Gail Dristle came to work full of trepidation. She had awokened with such overwhelming fear that she considered not going in. Now, walking down the hallway, she saw a colleague standing by herself. – *Reader's Digest*, August 1998.<sup>1</sup>

大江（1983:228）では、前位分詞構文が談話の先頭に生じると、意味上の主語の特定が後続する主節主語まで延期されることになり、文の知覚処理上の不都合が生じるとしている。しかし、小谷（1992）では、無差別に長編小説、短編小説各100を選び、その書き出しを調べ、次のような例が見つかったと報告している。

(2) Winded and coughing, I lay on one elbow and spat a mouthful of grass and mud. The horse I'd been riding raised its weight off my ankle, scrambled untidily to its feet and departed at an unfeeling gallop. — Dick Francis, *Reflex*. (小谷 (1992:243))

後続する文脈が示されていないのでここでは深く立ち入ることはできないが、小谷 (1992:243) では、(2) の例が推理小説の冒頭であり特殊な文体的効果を意図しているために前位分詞構文が談話の先頭に来ているとしている。<sup>2</sup>したがって、前位分詞構文は、特殊な文体的効果を意図している場合を除き、原則として先行談話から意味上の主語が明瞭な場合ということになる。

しかし、推理小説でなくとも談話の先頭に前位分詞構文が用いられることがある。

(3) Sitting in a café, I was feeling proud because I had quit smoking. I ordered coffee and put all thoughts of a cigarette out of my mind. Just then a stranger walked up to me and asked how long it was since I had stopped smoking.

“One week,” I answered. “But how did you know?”

“Because,” she said, “you just stubbed a biscuit out in the ashtray. — *Reader's Digest*, August 1998.

(3) は、これで全文であり読者による投稿エピソードである。確かに意味上の主語を後続する主節まで待たなければならないとしても、sitting in a café は文体的に特殊な効果を表しているとは言えず、café という場所に誰かが客として座っているということを談話の先頭で示すことで、後続する談話の状況あるいは場面を設定しているにすぎないように思われる。

さて、本小論ではこのような談話の先頭に来る前位分詞構文の機能について

て、実例の観察を通して考えてみたい。

## 2.

一般に分詞構文は文法的には文中で副詞節の働きをすると考えられている。談話の先頭に生じる分詞構文について考える前に、本節では、同じ文法的働きを持つ副詞節が談話の先頭ではどのような役割を果たすのかを見ておきたい。

Inoue (1982:277) では、時や場所を表す副詞語句を *scene-setter* と呼び、談話の口火を切る表現として多用されることが指摘されている。

(4) When he took office, Jimmy Carter was very much a stranger to most Americans as well as an outsider in Washington. — *Newsweek*, January 30, 1978 (Asano, Washio & Ogawa (1980:77))

なお、Asano, Washio & Ogawa (1980:77) によると、(4) のように前位の副詞節が談話の先頭に生じているのは、話題 (Topic) である Jimmy Carter が置かれている状態を伝えたいからであり、そしてこの状態は後の記事の内容にとって重要なものとなるからであると述べている。

さて、前位の副詞節には後続の情報を理解するために談話の流れに方向付けを与えるという機能があるということがよく指摘される (Chafe (1984: 444); Matthiessen and Thompson (1988:314) など)。特に談話の先頭では、読み手は後続する談話についての情報を持ち合わせていないと考えられるので、読み手が談話の流れについていけるよう準備を整えるために、時や場所などの背景情報を他の情報に先行させることで、読み手に具体的な場面を想起させる必要がある。この意味で、談話の先頭に来る前位副詞節は、*scene-setter* として談話全体の流れを方向付ける重要な働きを持つと言える。

## 3.

ここで、前節でみた談話の先頭に生じる前位副詞節の機能と分詞構文の特徴を考慮に入れて、談話の先頭に来る前位分詞構文の働きを考えてみたい。

前節で触れたように、前位分詞構文も非定形ではあるが副詞節の一種である以上、Chafe (op. cit) も指摘するように、前位分詞構文も談話の流れに方向付けを与えるという機能を当然有していることになる。ただし、接続詞のない前位分詞構文は明確な論理関係を示せないので、談話の先頭に来る場合、読み手に対する負荷をかけないようにするためにには、内容的に制限が出てくると思われる。つまり、場面の設定に役立つ情報が分詞節内になければ、前位分詞構文は *scene-setter* としての機能を果たさないことになる。(2)で見た例では *in café* のような場所の副詞句を含んでいた。ここで重要なことは前位分詞構文には述語が含まれることで、その時や場所における主節主語で表される名詞句の動作や心的状態を付け加えられるという点である。

また、主節から見て独立性が強くなったとはいえ、分詞構文の意味上の主語がほとんどの場合、主節の主語を指すということから、本来分詞構文は文の主語を修飾する形容詞的修飾語句だと考えることもできる（大江 (1982: 224)）。そうだとすると、主節主語の特徴を具体的に表す動作・状態を述べることで、談話の流れにとって重要な話題の確立を助ける働きを持つと言える。

以上をまとめると、談話の先頭に来る前位分詞構文の特徴については次の2つがあると考えられる。*scene-setter* としての機能と、主節主語を話題として確立させるのを助ける機能である。ただし、これら2つの機能のうち、談話の先頭に生じる前位分詞構文は一方の機能しか持たない場合もあるし、両方の機能を持つ場合もある。<sup>3</sup>

さて、次節においてはここで述べたような特徴がどのような形で実際の談話の中で具体化されているか見ていくことにする。

## 4.

まず、(3) で見た例についてもう一度考えてみたい。ここでは、冒頭箇所のみ (5) として再掲する。(5) では、話題となる主語名詞句 I の状態をも伝えているが、sitting という状態（姿势）と in a café という場所の副詞句の組み合わせで場面を設定している。<sup>4</sup>

(5) Sitting in a café, I was feeling proud because I had quit smoking.

場所の要素は、(6) のように着点として表現されることもある。

(6) Returning home to his Congressional district, Rep. Nick Smith (R., Mich.) was shown a “notice of tax owed” the IRS had sent to one of his constituents. — *Reader’s Digest*, April 1998.

(5)、(6) の例は場所の要素だけが現れるという単純な例であったが、前位分詞構文には、複数の副詞句が生じることがある。次の例では、場所以外に随伴の要素が現れている。

(7) Dining with my family at a burger joint, we noticed a man juggling a diaper bag and his tray as he placed his baby girl in a highchair. He handed the girl some hamburger. Then, when ketchup got smeared in her hair, he removed a ribbon from his bag. He tried to pull her meager curls into some semblance of order, but every time he grasped the hair a couple of curls would fall out of his grip. — *Reader’s Digest*, June 1999.

(7) では、at a burger joint という場所の他に、dinning with my

family が客として食事をしていたことを伝える。そして、これが以下の文脈が展開する状況を設定している。<sup>5</sup>

さらに、(8) の例では場所以外に目的を表す語句が加わり、状況を一層明確に表している。

(8) a. Waiting in a long, slow-moving line for security clearance at the Edmonton International Airport in Canada, I was annoyed to hear a loud male voice behind me. — *Reader's Digest*, August 1998.

b. Waiting at the drugstore for some medicine, I noticed that the pharmacist had beautiful, even teeth. I complimented her, and she replied, "Thanks. That's because my father put his money where my mouth is." — *Reader's Digest*, April 1998.

c. Shopping at a neighborhood market for some plants, my wife spotted a flower called the gerbera. — *Reader's Digest*, June 1999.

さらに、(9) の例では場所の表現——正確には、経路表現——と時の語句を同時に含み場面の設定を明確にしている。

(9) a. Walking past a row of fast-food restaurants at lunchtime, I noticed a sign in one burger joint that read, "Open 25 Hours a Day." — *Reader's Digest*, June 1998.

b. Walking down the street one day, a woman heard a voice yell, "Stop! If you take one more step you will be killed!" — *Reader's Digest*, September 1998.

次の例では、時の副詞要素として while 付きの分詞構文が現れている。場

所に関する情報が while 節内に現れているので、複数の状況要素が前位分詞構文に現れていると考えてよい。

(10) Setting off the alarm while passing through a metal detector at McCarran International Airport in Las Vegas, a traveler was asked by a security agent if he had any change.

“Gee,” the man said, turning to his wife, “you’ve got to tip everyone here.” — *Reader’s Digest*, April 1998.

なお、Setting off the alarmだけではどんな状況なのか不明であるが、while 節の内容を読んでいくことで警報が鳴ることの意味が明確になる。この例は、前位分詞構文が場面を設定するだけでなく、空港での搭乗手続きの一場面を述べることで、次に来る意味上の主語に関する特徴を明らかにし、また、読者には飛行機の搭乗客が主節の主語に続くという予測を可能にさせる。

さて、今までの例では場所や時に関する情報が何らかの形で表されていたが、次の(11)の例では場所や特定の時が表されておらず、前位分詞構文が *scene-setter* としての働きを持たないように思われる。

(11) a. Receiving her first paycheck, my teen-age daughter complained to me that the amount was much less than it should be. — *Reader’s Digest*, April 1998.

b. Preparing for a family vacation, my sister-in-law and her husband explained to their young children that they would be sitting in the car for a very long time. The kids were told they would not be arriving at their destination until after dark, and were warned not to keep saying,

“Are we there yet?”

After a few minutes of peaceful driving, their five-year-old daughter asked, “Is it dark yet?”—*Reader's Digest*, June 1998.

しかし、実際はそうではない。(11a)では *her first paycheck* の助数詞が特定の時期を容易に想起させる。(11b)では、*preparing for* で表わされる行為が *a family vacation* より前であることを含意しており、これは次のパラグラフの冒頭にある *After a few minutes of peaceful driving* と時間的対比をなしていることからも確認できる。

以上で見た前位分詞構文は、移動や静止・姿勢を表したり、特定の場所と結びつく行為を含んだりという点で *scene-setter* としての役割が明確であった。しかし、次の例のように、場所で表される語句が直接場面を設定する働きを持たない例もある。次の例では、前位分詞構文の役割が分かりやすいように全文を引用する。

(12) a. Looking for exotic artifacts to sell in his African-art store, my brother, Warren, once traveled to South Africa. While on a buying trip to a rural village, he encountered a Zulu native carrying a large piece of wood on his head. Warren eagerly asked the man what he intended to make from the beautiful piece of wood. The native eyed my brother suspiciously and replied, “A fire.”—*Reader's Digest*, June 1998.

b. Hoping to learn more about financial matters, I visited a bookstore and grabbed a copy of *Personal Finance for Dummies*. A glance at the book's price sticker, however, revealed how little credit the store's management gave

people like me. It read: "Publisher's list price: \$ 16.95; our discount price: \$ 17.99.—*Reader's Digest*, August 1997.

(12a) では、*exotic artifacts to sell in his African-art store* を探すという行為そのものが後の文脈の理解に必要である。2文目の副詞節中で *a buying trip* と言い換えられていることからも分かるとおり南アフリカへの旅行の動機を表し、主節主語 Warren の職業を間接的に読みとることができる。そして、ズール人が頭に載せていた木の用途に対する Warren の誤解が最後のおちにつながっている。一方、(12b) の例について考えると、誰かが何らかの欲求を持っていると添え述べること自体、それが主節の行為に対する動機や目的を表すことになる。そして、この動機を理解していなければ、この話のおちの面白さが伝わらないことになる。なお、(12) で見た前位分詞構文は両方とも動機を表しているが、この種の前位分詞構文は直接的に場面を設定することはないが、場面を拘束するという意味では一種の *scene-setter* と見なせるのではないかと思われる。

本節の最後に、特定の場所や時も表さず、主節主語の特徴のみを記述している例について見ることにする。(13) では、状況の要素も目的も表されていない。着用しているものをひとつひとつ列挙することで、主節主語の John Dodge の特徴を記述している。この服装に関する情報は、後の部分を理解するのに重要な情報であり、John Dodge がこのような服装をしている理由が後続する談話で説明されている。

(13) Wearing baggy, red-checked pants, floppy oversize shoes and a red rubber nose, John Dodge lopes into the hospital room at Children's National Medical Center in Washington, D.C. He takes a quick look at four-year-old Charlie Greener, who has lymphoma, and comes up with a novel treatment. Flailing a fly swatter, Dodge pretends to annihilate a huge

rubber bug he has slipped under Charlie's bedclothes. —  
*Reader's Digest*, August 1998.

## 5.

最後に小谷（1992）が言及した文体的効果のあるような場合について見る。(14)は、短編のミステリー小説の冒頭部分である。

(14) Looking at the photograph, Wilson Friendly had his doubts. After one glance he thought, piece of junk! And who wouldn't? It was an electric guitar with such a battered and abused appearance you figured it must have been dragged behind a car for a clock. — Jas. R. Petrin, "The White Penguin," *Alfred Hitchcock's Mystery Magazine*, July /August 2001.

この例では、定冠詞の付いた名詞句で表される *the photograph* がどんな写真か分からぬ。したがって、Wilson がなぜ疑問を持っているのかも不明である。2文後の *It was an electric guitar ...* の箇所を読んで初めて *the photograph* がエレキギターの写真であったことが分かるし、Wilson が疑問を抱いた理由も分かる。しかし、依然として、どこでいつ写真を見ているのかといった場面の設定もなければ、Wilson がなぜその写真を見なければならぬのかといった情報が全くない。読み手はサスペンスの状態に置かれたままになる。ここで使われている前位分詞構文は談話の流れに方向付けを与えることはない。なお、読者をサスペンスの状態に置いているのは前位分詞構文による効果だけではなく、冒頭で定冠詞付きの定名詞句が使われたり、人物設定が行われていなかったりするためでもある (cf. Uchida (1997:163-8))。

談話の先頭に生じる前位分詞構文には、意味上の主語の確定を主節まで待たなければならないというハンディキャップはあるが、後続する話題となる名詞句の特徴や置かれている状況を素早く表現できるという利点がある。そして、この前位分詞構文の性質によって、特に紙面の限られた短い文章で用いられると簡潔で効果的な情報伝達が可能となるのである。このことは、談話の先頭に来る前位分詞構文が *Reader's Digest* 合衆国版の Departments ——1999年 October 号以前は Regular Features と呼ばれていた——と呼ばれる読者からの投稿を中心とした短い記事に多くみられることに反映されている。<sup>6</sup>

### 注

※ 本稿は 1999 年度京都女子大学研究経費助成の成果の一部である。また、本稿は関西語法文法研究会第 2 回例会（2000 年 12 月 9 日、於関西学院大学）で「テクストにおける前位分詞構文の機能」と題して発表した研究内容の一部を修正、発展させたものである。

- 1 ここで用いた *Reader's Digest* はすべて米国版のものである。
- 2 小谷（1992:243）は、この前位分詞構文の特徴を「dynamic で mystery 的要素が強い」と表現している。つまり、Winded and coughing しているのはどうしてか、I はいかなる特徴を持つ人物なのかが冒頭では分からぬからである。（2）の前位分詞構文は（14）で見る例と同様、場面の設定や主語の特徴の具体化に何の貢献をしない例であり、その意味で読者をサスペンスの状態に置く例だと言える。
- 3 ここで論じる前位分詞構文の機能は、次のような談話の冒頭に生じる日本語の関係節と似たような機能を持っている。
  - (i) 二十九日午後十時三十五分ごろ、東京都渋谷区猿楽町一二の同区立猿楽公園付近を巡回中の渋谷署員が、公園内に展示してあるかやぶきたて穴式住居（復元家屋）が燃え上がっているのを見つけた。 —『読売新聞』1980 年 1 月 30 日 (Asano, Washio and Ogawa (1979:91))
- 4 場所を含む前位分詞構文であっても、述語によっては場面を設定するのではなく、主節主語の特徴を表すこともある。
  - (i) Growing up in rural Freeport, Ill., I got my first "real" job at the local carwash. I was 16 and worked every day, all summer, for a dollar an hour. Ten of us from widely different backgrounds cleaned cars in

teams, which taught us to pull together.—*Reader's Digest*, January 1999.

5 主節主語は we であるが話題ではなく、a man が後続文脈では話題となっている。主節述語に知覚動詞 (noticed) を用いることで観察者を顕在化させたものである。いずれにしても、冒頭の dining with my family at a burger joint は scene-setter として機能していることに違ひはない。なお、(6) の dining —— (5) の sitting も —— は場所との関連から後続する主語が典型的には客としての資格を持つことを表す。

6 実際、3 節で見た用例は、(13) を除き、100 語前後の短い記事からのものである。

### 参考文献

Asano, Akiyo, Ryuichi Washio, and Kunihiko Ogawa (1979) "Some Aspects of Discourse-Initial Sentences: A Case Study from English and Japanese," 井上和子 (編) 「日本語の基本構造に関する理論的・実証的研究: 研究報告」 pp. 57-97.

Chafe, Wallace. (1984) "How People Use Adverbial Clauses," in Claudia Burgman and Monica Macaulay (eds.) *Proceedings of the Tenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*: pp. 437-439. Berkeley Linguistics Society, University of California Berkeley

Inoue, Kazuko. (1982) "An Interface of Syntax, Semantics, and Discourse Structures," *Lingua* 57, pp. 259-300.

甲斐 雅之 (2000) 「前位分詞構文と逆行照応」『英文学論叢』44号 pp. 101-120.  
京都女子大学英文学会。

小谷 晋一郎 (1992) 「前位分詞構文」成田義光教授還暦祝賀論文集刊行会(編)『成田義光教授還暦祝賀論文集』 pp. 229-244. 英宝社。

Kuno, Susumu. (1975) "Three Perspectives in the Functional Approach to Syntax," *Papers from the Parasession on the Functionalism*, pp. 276-336. Chicago Linguistics Society.

Matthiessen, Chirittian and Sandra, A. Thompson, (1989) The Structure of Discourse and 'Subordination' in John Haimann, and Sandra A. Thompson (eds.) *Clause Combining in Grammar and Discourse* TSL 18, pp. 275-329. John Benjamins Publishing Company.

大江三郎 (1982) 『動詞(II)』研究社

Uchida, Seiji. (1997) "Text and Relevance," in Robyn Carston and Seiji Uchida (eds.) *Relevance Theory: Applications and Implications*, pp. 161-178. John Benjamins Publishing Company.